

開化問答二編

上

小川 爲治 著述

開化問答二編

惟摩

序

夫七弦琴を弾く詩を歌ふのそ人乃心を盡
ぜしむるも二味線を引て淨瑠璃を語る者
及び端語を引て小言をいふ者は人乃心を移
らざるも二味線を引て異見をいふもの
及び端語を引て七弦琴や詩や論語ハ世間より學者
先生と号する人ニあらずもバ知らぬものとして
三味線や淨瑠璃や二味線ハ世間よりカラ世に榮

苦榮と卑めらるる人より常に眼子見口子
語り心は悟まる所のものなまじはれり凡そ世
間はむづかしき道理を知らざる者少
むづかしき道理を知らざるものはおろ
むづかしき道理を知らざる者自ら
力もなすむづかしき道理を知らざる
ものもむづかしき道理、或は知る者、他
人の力も知らざるはむづかしき道理を知

るゝとあるはず然れどもむづう一たを程をを
るゝとあるむづう一も道理を教ふるは未
だむづかも道理を知りたる者の務とてふ
お一知り実を務むづう然るは少弱をて
むゝはさういへ矢張むづう一矢は力を以てせ
むゝある一むづう一も仕事を以てせは
うゝもあらうともその甲斐なき一とてめ
うれ世々の親の少兒に業をのやする仕事や

少児を養ふのやまを考へて爲むる事を以て
これを誘ふ事子戒以て誘ふに少児は其の菓
子の甘き故に之を以て養ふ苦きを知らず
これより其の病氣たちちち平癒す
又、姉妹を養ふに其の少児は其の菓子を
以て養ふや養ふに其の少児は其の菓子を
事の上より其の用を以て我嘗て其の養ふに
心せしむるあり故に其の開化問答を作ると始り

決してむづかしき文字やむづかしい文句を用ひ
ずしむ勉めしむるカラ無茶苦茶と呼ぶるも
方との者こそなり法心と思はしその法心は仰さる
所の法心と擇しむるなり然もどもあり書り
裁きしむる理をまづて熊膽や墨丸よりものこ
しむるもなりしむる且その文句は法市や松風など
の風流もなりはしむるもなりなりカラ世茶苦茶
と呼ぶるも法心は中へ一口ありしむるなり

うーとーいふくはおもづのりあそはさるゝ
 心何ぞーよーおもづありあそはさるゝ
 うばおもづのりあそはさるゝ
 さるゝは自分の病氣は平氣せぬまじり
 へおもづありあそはさるゝのあつおもづ
 かりあつあつ、否こころさるゝは腹をさるゝこと
 ぞれ蓋しその道理いたとんいかなのそま
 さいのちりとも常はその法心と思ふしその

清口は仰きくく乃ち加ふるを蘇末やうくもた
市や松風乃風味をうて清進めやうくく
を蘇末やうく上らぬは仰きくく必ず
右 upper ぬとは仰きくくすド 古き錢二番の
序とく

明治六年四月

小川為治



性理



目錄

①

政府せいふの成立基りきの問答もんたふ

②

人民じんみんの政府せいふに對たいする職務しやくむの問答もんたふ

③

ボリスボリスの問答もんたふ

④

大陽曆たいやうれきの問答もんたふ

⑤

地券發行ちけんかうの問答もんたふ

⑥

證券印紙しんし發行かうの問答もんたふ

⑦

貨幣紙幣かへいの問答もんたふ

開化問答二篇卷上

小川為活 著

舊平

サテ開次郎さん、過日も足下小對し、いろいろ、さかぬ
不狸窟を論せし、小足下乃、活心切を以て、其等乃道理
を一々、活辨解下されたを、さきふより、僕の大せま
での疑念も、大方消失せ、胸中を、恰も雲霧が散りて、明
月を見る如く、しめて、誠小ありがたき事小、覺え、そ
の後、いらぬ、活世活ちが、持々が、病めて、活活し、乃、趣

を以て懇意の人物を見懸くせむ説得がてらよりく
話をしたる事もござるさる中にも屈服する人もあり或
は強情にておせ等乃議論のふても承知せぬ人もあり
てその承知せぬ人乃言ふをきけむまた至極む乃道
理も覺えおせがため僕をまた一層の疑惑を増した
る事てござるおかせは今日乗上せしハ餘の儀もあ
らずおせ等乃人より聞受し議論を以てまた足下にお話
しやし僕の疑惑をとくためめて聞さん毎度お暇か
きの事ぢがう今日もどうぞ僕乃相手をなされて下され

ませ、サテ開さん第一番、僕、おでからさるる、今、法
役人方乃職務、おさる元公方様の時代、お法大老
法老中若年寄を法三役と唱へ、天下の政事を總て、
の法役人方乃進退、おその下、お列り、寺社奉行と
神社寺院乃事を掌り、町奉行も、所方乃事を掌り、法勤
定事行々總て百姓、お拘りたる政事を掌り、公事訴訟
乃類、おこな、法の役人方乃引受け、おその規則正
しく、て手筈のよく整えて、おたる事を、今更、いふま
でも、おさる、ませ、ん、實、お天保年間乃世界、おその上、おな

き泰平の時ふて一寸あたゝる話―なせとも公方様が
召上る法菓子をかゝり一年中六万両位法買上ふ
なつたとりし升、さきか世間乃殷富なる事をこそせふ準
―て推計らる次第ふて正真小天下泰平國土あ穂と
り言葉小通む―時節を元乃公方様乃法治世の事
でござりませう、大せいな政府小嚴重なる規則ありて
萬事乃手筈がよう整むてあたるゆゑてござるおき小
引の只今乃法政事を何乃さば、僕をさきすて太政
官や大藏省といふものゝ金札乃名前とのこ心得みたり

一、小、大、せ、後、所、名、ダ、さ、う、で、お、さ、る、左、大、臣、や、右、大、臣、

と、神、様、乃、門、番、を、し、て、ゐ、る、木、像、の、名、に、あ、ら、じ、い、て、太、政、

官、乃、役、名、ダ、さ、う、で、お、さ、る、そ、の、他、参、議、ダ、筈、竹、ダ、ノ、と、い、

役、名、と、恰、も、百、人、一、首、乃、名、前、付、乃、如、く、大、の、舊、平、な、ど、

ふ、と、い、う、上、理、室、カ、サ、ッ、バ、リ、そ、の、筋、合、を、曉、了、事、カ、出、来、

ま、せ、ん、ッ、コ、デ、カ、く、性、根、も、忘、れ、ぬ、役、名、乃、人、ガ、政、事、を、執、

行、ふ、と、い、ふ、昔、一、乃、お、も、か、け、の、失、果、て、た、る、と、い、ふ、十、萬、ハ、

て、役、所、を、い、は、す、練、化、石、と、い、う、役、人、と、い、は、す、窄、袖、細、袴、乃、

毛、唐、く、と、い、う、法、觸、法、布、告、と、い、は、す、チ、ン、フ、ン、漢、語、乃、四、角、張、

つ
たる文字とかりて民百姓と閑夜不知らぬ山崎をた
どる如く我々籍と誰が支配する事か我家事を誰が
保護する事か我々負運上と誰が差出さるべき事か我
公事訴訟を誰が裁判して貰ふべき事か更なるその目
的乃ちおせぬより或は規則に觸れ罪科を犯して思ふ
もつらぬトシタ災難に陥る者が深山にさざる蓋いかく世の
有様の變革たる根原と政府より舊來の仕来りを
こなありきとのと慢心毛唐人乃ち其似をするゆゑで
おさる金身毛唐人の面を髯がはえとむらゝき者より

法俊人方々かやくえ なたにな毛唐人乃以所を信仰しんぎ一随したが毛唐人

乃言もとむ義を以て天子様まで詐騙あだま一まう一たる次第しだい以て

かる時節ときふし不出逢いそ山我々を實不迷惑みづか千萬えんたる事ニぞ

針ハテ政府せいふあてかく民百姓の難浪なんなみを引起おこ一あせめて天子

様乃法身上さま かーん ちやうが富元ゆたかニなり一かと思へむさ々なく一て

天子様の法身上てんしやうを却てましく貧乏ひんぱふニ陥おちり一やうニ

見え針そのまけを昨年さくねんの春天子様の法所ほーしよが炎焼えんやうせ一

おとがわさるさるニ今日けふまでその法善請かふしんが出来できば一て矢

張ちやう仮か法殿ほふだん小法師居おそまゐをさける所を以て見せをせ天子様

乃法身上の貧乏なり——證據めてまた下る乃心服せざ
 るのも推計らる、次第でおさる昔—公方様乃法住居が
 焼失する事ありとも僅二月か三月の間小元乃如く法普
 清が出来上りて公方様が流泊同様に住居を一年も
 二年もたぎさる憂を決してたがくものでおさるさは
 今いまの天子様乃法身上を昔—乃公方様乃法身上小
 較ぶきを提燈と釣鐘程乃相違ひて實小天子様を情を
 けき不ど可愛さうなるもの小存トけさせどもおさせな
 慢小毛唐人を真似日本乃古風をきて賜ふ所より生れ

了自業自得じふぎふとくの報むくみなきを無擾次第むじょうしだいでみざるナントか開さん

今天子けんてんし様か先親せんしん仕来りしきたをきく、性根しやうこんも忘れざる役名やくなを

採用しやうようゐたすび譯わけ乃なりからぬ政事せいじ乃なり仕方しかたをなさるゝを詰つ

り法おのり自ごなる益えきもあらば又下またしもる乃なり益えきもあらざる事ことをて

いそゆる骨折こつこ折をの草卧くさふし儲もなきをかも餘計よけいの仕事しごとを法おのり

度たびになされ矢張やっとう昔むかしの通り法おのり三役さんやく或あるも三奉行さんぶぎやうなど

の法後人おのりごを以もつて法政事おのりせいじを執行しやうぎんせしめられなきをきく

り民百姓たみひやくしやうが心服しんぷくして只今ただいまの如ごとく法住居おのりぢやうこは法差支おのりさしつかへな

きる、憂うれひもなきにして元乃公方もとのかた様の如ごとく殷富うんふなる法おのり

募くろしをなさる事ことを得るならんと大の舊平きうへいなど景あき
ちから案あんする事ことでござるがそれニ付つき足下あたまへの法見あて込こも
如何いかでござる

開次郎かいじろう

ある不ふと舊平きうへいさん足下あたまへ乃しか法疑念一寸はふぎねんしゆん聞きちを理り不ふ適たふし

法はふ尤また乃しか中ちゆうニ覺おぼゆせどお世よをよしく考かんがへ見みせむな本もと

を正ただすぬ僻論へきろんひて畢竟ひつまいともたらぬ不ふ理窟りくでござる幸さい

今日けふも大の開次郎かいじろう用事ようじもなま間暇ひまの事ことをせば大だい

そより足下あたまへの法相手はふあひてふなり僕わたくしの思おもふ所ところを底蘊そこいんを法はふ

話（ワ）さん（さん）と（と）ん（ん）ー（ー）け（け）サ（サ）テ（テ）初（はつ）編（へん）も（も）一（いち）寸（すん）話（わ）話（わ）ー（ー）ア（ア）タル

通（と）り（り）元（げん）来（らい）國（こく）の（の）政（せい）府（ふ）と（と）そ（そ）の（の）人（じん）民（みん）の（の）權（けん）力（りき）の（の）寄（よ）合（あ）ー（ー）と（と）の（の）な

せ（せ）を（を）國（こく）の（の）政（せい）府（ふ）が（が）行（な）ふ（ふ）百（ひゃく）般（ぱん）の（の）政（せい）事（じ）と（と）も（も）と（と）う（う）り（り）そ（そ）の（の）人（じん）

の（の）安（あん）樂（らく）を（を）謀（まわ）らん（ん）た（た）め（め）に（に）行（な）ふ（ふ）仕（し）事（じ）も（も）相（さ）違（ちが）ひ（ひ）が（が）ざ（ざ）り（り）ま（ま）せ（せ）ん（ん）す

る（る）に（に）舊（きう）来（らい）の（の）政（せい）府（ふ）と（と）總（そう）と（と）大（だい）の（の）趣（しゆ）意（い）も（も）悖（はい）り（り）人（じん）民（みん）の（の）安（あん）樂（らく）を（を）

謀（まわ）る（る）べ（べ）き（き）政（せい）事（じ）を（を）以（もつ）て（て）却（か）つ（つ）て（て）人（じん）民（みん）の（の）疾（しやく）苦（く）を（を）引（ひ）か（か）へ（へ）る（る）次（じ）第（だい）

も（も）て（て）畢（ひつ）竟（けい）人（じん）民（みん）を（を）以（もつ）て（て）政（せい）府（ふ）の（の）所（しよ）有（いう）物（ぶつ）と（と）心（しん）得（とく）ー（ー）の（の）点（てん）で（で）大（だい）

ざ（ざ）る（る）政（せい）府（ふ）の（の）趣（しゆ）意（い）か（か）く（く）の（の）如（ごと）く（く）な（な）せ（せ）む（む）世（よ）の（の）有（いう）様（さま）も（も）な（な）ら（ら）な（な）

き（き）も（も）随（したが）ひ（ひ）て（て）弱（よわ）き（き）者（もの）と（と）恒（つね）に（に）強（つよ）き（き）者（もの）と（と）暴（はう）虐（ぎやく）も（も）達（たつ）ふ（ふ）威（い）勢（せい）

多き者々恒つねに威勢ゐせき少き者小耻辱ちぢぶを與へ人間の交際かうかい

恰あたも禽獸きんじうの群ぐんの如くして今いまより其そのを考ふを實じつ

小胆こたんのつづろ、程馬鹿ほどばかけたる世界せかいでござりけり今いまかく

僕わがが舊政府きうせいふの事を誹謗ひかうするを強こゝろど暇いふふなり奉公ほうこう

人が舊主人きうしゆじん乃ひ非ひを數かずふる如く甚こゝろだ腹黒はらぐろなる仕業しぎふな

りといへどもその非ひを擧あげむその道理どうりが聞きこえぬ無な

據よるの下めたるもまたいさゝか擯擧へんきよて舊政府きうせいふの道理どうりに背そむ

きたり一いち次第しだい柄からを話わ話わ一いちアえまづ第一だいいち旦下たんげの仰おほさるゝ

傳おと三役さんやく或あるも三奉行さんべいぎやうをたゞ下したの小人せうじんに玉たまるまでその

役義を得る有様を考へむらんやされ即心願といふ内

願となへ權勢ある役人の門戸臺所不媚む諛ひ我

身上を傾くるなどの賄賂進物を用ゐかくして稍くその

人の取持を蒙りてその役義を得る次第でぶざる心願

人のかく無益な金錢を費まじける役義をだし得せ

また他より賄賂進物をとるを我おせまで使ひ捨たる入

用を忽ちとり返さ事を得るゆゑしておせを以て見せ

昔乃役人を恰も免許を受けて行ふ盗賊乃如くその政

府を不盗賊の集會所ともするべきものでござるあ

不正^{ふせ}なる役人^{やくにん}を以て組^{ぐみ}立てたる政府^{せいふ}の政事^{せいじ}乃

無理^{むり}非道^{ひどう}をもとよりいふまでもござうません今^{いま}これを公

事^{こと}訴訟^{しゆそん}の上^{うへ}に就^つて詭^ぎせむ吟味^{ぎんみ}役^{やく}を理^り乃曲直^{きよくちよく}に拘^くをら

に恒^{とこ}に進物^{しんぶつ}の多少^{たさう}を以て裁判^{さんばん}ある賦^ふたせは今日^{けふ}願人^{がんにん}

が進物^{しんぶつ}を贈^{おく}せむ願人^{がんにん}乃風波^{ふうなみ}をよく明日^{あした}相手方^{かた}より

賄賂^{わいろ}を用^{もち}るを相手方^{かた}乃旗色^{はたいろ}を盛^{まか}んり一^{いつ}竟^{つひ}ふその勝^{かち}

公事^{こうじ}を進物^{しんぶつ}乃多^{おほ}き方^{かた}不^ふ與^{あた}ふ事^{こと}でえざる全^{ぜん}躰^{たい}裁判^{さいばん}

を政府^{せいふ}の役目^{やくめ}中^な第一^{だいいち}番^{ばん}肝要^{かんよう}乃そのなるこそせむらかく

の有^{あり}様^{さま}をせむその他^たに無理^{むり}非道^{ひどう}をいふまでもござうません

さき^{さき}を昔^{むかし}の世^よを啼^な兒^こと地頭^{ぢとう}と勝^{かち}せぬといふ諺^{ことわざ}乃

通^{とほ}り政府^{せいふ}といひ法役^{おやく}人^{ひと}といへも百姓^{ひやくしやう}町人^{ちやうじん}乃金銀^{きんぎん}財産^{ざい産}と

勿^{もちろん}論^{ろん}あや娘^{むすめ}を強奪^{かうたつ}せとも更^{さら}ふさ一^{ひと}構^{かまひ}ぢきが如^{ごと}く百姓^{ひやくしやう}丁

人^{ひと}をかゝる無理^{むり}非道^{ひどう}なる仕向^{しむけ}を受^うくともさきを訴^{うた}ふべき

所^{ところ}なきやゑたゞ口^{くち}を黙^つさく涙^{なみだ}を飲^{のみ}り込^こむわかりきや實^{じつ}ふ

今^{いま}より十年^{じふねん}をかり以前^{いぜん}まで悲^{かな}しくいとも震^{おど}らゝいともいそ

んかたなき世^よの有様^{ありさま}でござりけ々あせ等^ちの事^{こと}を今僕^{いまぼく}が

口^{くち}新^{あらた}しく法話^{ほふわ}一^{ひと}尸^{おし}さんとも足下^{あしもと}の法心^{ほふしん}中^{ちゆう}にて元^{もと}乃世^せ

思^{おも}の有様^{ありさま}を法考^{ほふかう}へおろれやうをサツパリと法^{おほ}了^り解^{かい}ふならん

事にてナニ「舊平さん」只下もその頃を政府や後役人

無理非道なる仕業をせむ者と思召たる事でござら

うサテおせより世小政府とふものある道理を後話しやさ

人譬を男女一群乃人数ありて或る無人乃土地を見

出しおせに移住せむ事あせむ直に家を作り地を耕

し山小藪を採り野小獸を狩り海小魚を漁りて名

衣食住乃計をせむ事でござらうかくの如く人々骨折

を勉むせむ自然衣食住乃手立も備り餘計乃品物

も貯へえらる事にて餘計乃所有物あせむまた互

小交易こあうぎして名な々々その心情しんじやうを饗あかしの幸福さいふを増くえ次第しだいでござるもの人々ひと乃なり有禄ありきかく乃なり如ごとくちきむ皆みな安楽あんらくして更さらふ心配しんぱいなむあづき苦くるぢきども人乃ひと料簡れうかんを奸曲けんくの多おほき者もの也なり或ある人乃ひと束ねておき一ひと穀物こくぶつを掠あむるものありあり或ある人乃ひと取入とりいておき一ひと穀物こくぶつを掠あむるものあり甚こゝろき恒つねに腕うでの強つよきを恃たのみ人乃ひと所有物しやうぶつを奪取うばとりて我物わがもの顔おもてに用もちゐるものもありて竟つひふ六むの一群ひとに傷きずく料簡れうかんの者もの一人ひとりもなき事こと小ぢり各々おのづかた人乃ひと物ものを掠奪ろくだつせんとの心掛こころかゑる有禄ありきに陷おちる車くるまでござる勢いきさむ六むの

すゝ小捨あきど一群の混雜も勿論終小生活の道も盡

果つる事也又仲間一統相談より上悪事をさる者あせむ

大勢ふて取押へたせを懲らぬ法を設くる事ありたせ

即や、政府の成立姿でたざるサテ追く人数も殖え家数

も増して元の極小仲間一統集會する事も手重小なり

り且集會をとも折合のつらぬ懼きあるも又更に相談の

上仲間中より若干の人を名代人小撰と出—たせを—

てたせ等の規則を設くる事及び規則を執行ふ事を

引受さしむあき助後の立法官及び行政官の姿でたせ

るさりながら悪事を行ふ者ある大と小の各代人一統集
會あひあひするも却て面倒えんどうなる事なれば更さらふその中より若干の

人物じんぶつを撰えらび出だしお世よをして恒とこに仲問なかまの規則きぎうに從したがひて

裁別さいべつする役目やくめを引受ひきうけけりむめは即後すなはちの裁判官さいはんくわんの姿で

あさるいさるに政府せいふと云ふ者綺羅星きらせいの如く居別ゐべつ

べととの本源ほんげんを尋ねせむ一つも大の道理だうりの外ほかるもなき筈はず

下はさるさるさむを我われく乃治めらるる日本にっぽんの政府せいふと云ふとをもそ

の成立なりたち基もとを大方おほいの道理だうりに相違さういなき事ことに心得こころえ升あがるの

故ゆゑに政府せいふの成威光なりけいこうと云ふ者ものもとより人民じんみんの成威光なりけいこうに

て畢竟政府が人民より預りてあるもの不同違おざりや

人そせを舊來の政事と云の預り物を以て預け主と稱

く取扱ひたり―次第あり預け主とまた羊の煮えたるは

存トなき獣癡をかりたり―又無理非道の仕向を受

くといへども猫ふあひたる鼠の如く首を縮め尻を隠し

只管ふせふ順從して貴君の法無理法尤も匍匐踴躍て

あたるをけふしてその馬鹿よくき事ふまでもなく今

更あきを考ふせを無念千萬に覺え外あり即政府の

成立道理と舊來の政事の道理ふ背さてゐたり―譯

柄でささるサテ又吾輩萬國政體の模範に至りてゐるを

の國柄と人民の風俗とよりていろ／＼の差別あるを

せしむるを括ねて區別せむ大抵君主政治貴族政

治共和政治の三政體に歸する事でささる君主政治と

國に代り世襲の君主ありて政權總て君主の手にあるを

いふ貴族政治と國中の身分よりき者寄合む政事を行ふ

をいふ共和政治と身分の高下拘らずに國內の人民總

て政事を與かちをいふの三つの中貴族政治や共和政治の

事柄を今略話しテス所ふあまり入用なき事なれバツツト

守限へ取除けおききて君主政治を夫の話に就き入用

の政跡ゆゑ夫の譯柄のこゝろより法詔に即ち抑君主

政治を二通りの差別ありて一を立君獨裁といひ一を

君民同治といふ立君獨裁を君主の權威際限なくして

一國の人民を以て總て君主の所有物として人民の財産

を典奪するを勿論その身命を殺する事もある君主

一人の料簡より出るを以て蓋し古来より日本漢土乃政

事をいふ夫の君主獨裁を偶仁恵する天子や國王が出

る時も人民が安樂なる政事を蒙る事ありといへともその

人の息子とまた親不似ぬ鬼子にて地獄の鬼より羂き仕業

を以て人民を針の山に苦しめ血の池に泣かせ恒に三脉道

の苦痛を受けさせたる次第でござるさせむ君主獨裁と

全く正真の道理に背きたる者にてみせを野蠻の政治と

いふべし則かくの如き政治の下に住居する人民の無學文

盲なるをいふまでもござりません又君民同治とて一定の

規則を以て君主の權威を制限し萬機の政務を總て

君主と人民と相談の上執行しをいふみせを文明開化と

人の羨む英吉利杯の政跡にて正真の道理に適むたる

勿論實不善美を盡たる政治でござる蓋一はせ等の道理も今より二十年むかり前よりわからぬ間小誰一人をせを知者なり一は西洋と交際がむらぶてよりかろ國の學者等乃議論が渡来一洋く世間小あれを信ずる者ありて遂はせ等の道理が日中へ出る事を得たる次第でござるさせを舊來の政事を何るもこな公方様一人の榮耀榮花を盡さんため設けたる者にして將軍の株だふ手小入るせを誰ふても此の榮耀榮花を盡す事を得らるゝやゑ少く知恵のある奴を

でもむやに騷動を好むその騷動に乗じて甘く天

下をせしめんと較計たるよりみてかの明智光秀が信長

公を弑し大閤秀吉公が光秀を誅し徳川家康公が秀

頼公を亡しなむと唱ふる所を各く異うといへども

畢竟みな奸計詐術を以てその貪婪強欲の情を逞く

せん仕業不相違ひたりませんとの故に明智の政事か豊

臣より劣せしむるにあらばして徳川の政事が豊臣より優

せしむるにあらばたゞそれ等の人も博徒が博徒をまゐる如く

天下を以て賭物として互にその命を充ちめんとせし

事^{コト}や^ハ何^{ナニ}時^{トキ}の^ノ世^ヨも^モ人^{ヒト}民^{ミン}が^ガ手^テ足^{ソク}を^ヲ伸^{ノボ}ぶ^ル事^{コト}あ^リた^カ
 と^カざ^リし^テも^モと^トより^{ヨリ}お^ノあ^リる^ベき^キ苦^クふ^テ竟^ハふ^ル人^{ヒト}民^{ミン}
 の^ノ狭^セき^キ料^{リョウ}簡^{カン}か^ラ家^カも^モ政^{セイ}府^フの^ノ借^{チカ}物^{モノ}地^チ面^{ヘン}も^モ政^{セイ}府^フの^ノ借^{チカ}物^{モノ}
 金^{キン}銀^{ギン}諸^{シヨ}道^{ドウ}具^グも^モ政^{セイ}府^フの^ノ借^{チカ}物^{モノ}妻^{ツメ}や^ヤ娘^メも^モ政^{セイ}府^フの^ノ借^{チカ}物^{モノ}と^ト
 心^{ココロ}身^ミ命^{メイ}ま^マで^デ政^{セイ}府^フの^ノ借^{チカ}物^{モノ}と^ト心^{ココロ}得^エ政^{セイ}府^フが^ガ家^カを^ヲよ^ス
 大^{オホ}せ^セと^トい^ハへ^ハを^ヲ唯^{ただ}地^チ面^{ヘン}を^ヲよ^ス大^{オホ}せ^セと^トい^ハへ^ハを^ヲ唯^{ただ}金^{キン}銀^{ギン}諸^{シヨ}道^{ドウ}具^グ
 を^ヲよ^ス大^{オホ}せ^セと^トい^ハへ^ハを^ヲ唯^{ただ}妻^{ツメ}や^ヤ娘^メを^ヲよ^ス大^{オホ}せ^セと^トい^ハへ^ハを^ヲ唯^{ただ}身^ミ
 命^{メイ}を^ヲよ^ス大^{オホ}せ^セと^トい^ハへ^ハを^ヲ即^{すなはち}承^{シヤウ}引^{イン}し^テ唯^{ただ}と^トい^ハふ^タと^トい^ハふ^タ
 中^{ナカ}ふ^テ無^ム理^リな^ル仕^シ業^{ギョウ}非^ヒ道^{ドウ}な^ル仕^シ向^{キョウ}と^ト歯^ハを^ヲ切^キり^テ恚^{イカ}

り足摺りあしむして愁うれむとも明白めいはくふその筋道すぢみちを論ろんせれを

却かへりて返かへり公事こうじのためふなくあたらけ禍わざはひを重おもぬる事ことや無む

念ねんながら無む據よ政府せいふの意い不ふ曲まが順しんして其その言付ことづを肯うけがふ

たり一ひと事ことて大おほなるナニ下くだ藩はん平へいさん此等このとうの事ことを考かんがふれ

も昔むかしの世畧せかいを身みの毛けが戦栗せんりつやうでもおざらんか

只今ただいま此語このこと一ひと通とおり公方こうほう様の料簡りょうかんふて天下てんかを

我われ所有物しよいうぶつ年貢運上ねんぐんうんじやうを我身われみ上うへの賄まわひをさへすため不取ふと

立たつるものも心得こころえるや急いそぎ物入ものひり爲なして財用さいよう不足ふそくせる

時ときを忽たちまちち年貢運上ねんぐんうんじやうの歩合おあひを増ぞう加かする事ことありて水の

侵居しんきの焼失やうしつする時ときなども日本國中の大名旗本へは普ふ請しん金きんの傳でんと唱なへ普請金ふしんきんの上納じやうなうを言付ことづくる事ありて
大名旗本もまたその知行所ちかうじよの百姓ひやくしやう町人ちやうじんを雇あひなけ法用はふよう
金きんと名付なづけられをとり立上納たてあがしやうすかくの如ごとき譯令あひな
れむその普請ふしんの速はやに成就じやうじゆする事トント怪あやむ次第しだいをばざ
りませんされむかの玉乃薨たまふ珊瑚さんごの桶おけ迦羅あや白しろ檀たんを以もつ
て作り立たる法殿はふでんを實じつに人民じんみんの膏血かうけつの塊かたまりりやれべし
の開次郎かいじらうなどえおの上うへもなき穢けがら大おほききらめこおほ見え升かぶ
しうでぶざる舊平きうへいさんおれ等の事を法考はふかうへやうれた

らむ元の政府不^せど世に無^む法なる者^{もの}をな^なしと思^{おも}召^め大

とてむさらう^サテおれまて追^{おひ}く法^は語^ご一^{ひと}ス通^とりか

政府や法^は役^{やく}人^{ひと}方^{かた}が日本^{にっぽん}國^{こく}を一口^{ひとくち}不^ふ頼^{らい}張^{ちやう}富^ふ士^しの山^{やま}不^ふど

の糞^{くろ}を大^{おほ}く如^{ごと}き面^{つら}付^{つき}を威^ゐ張^{ちやう}てゐらうもその本^{もと}源^{げん}

を穿^{せん}鑿^{さく}おれも畢^{ひつ}竟^{きやう}日本^{にっぽん}中^{ちゆう}に三千五百萬^{さんしやうごばん}の人^{ひと}間^まに住^す居^ぐ

いてその仕^し事^じを打^{うち}任^{にん}一年^{いちねん}貢^{きやう}運^{うん}上^{じやう}の出^で銀^{ぎん}を^つ使^{つか}すや

ゑで大^{おほ}さる然^{しか}れ^ば當^{たう}今^{こん}の政^{せい}府^ふ不^ふて^に此^{こゝ}等^らの道^{どう}理^りを篤^{とく}と

心得^{こころえ}おれまての習^{しゆ}弊^{へい}を悉^{しつ}く除^{のぞ}き去^さりて公^{こう}明^{めい}正^{せい}大^{だい}なる

政^{せい}事^じを行^{おこな}ふ次^{つぎ}第^{だい}でむざる大^{おほ}の故^{ゆゑ}に當^{たう}今^{こん}の法^は政^{せい}事^じと上^{うへ}

向々君主獨裁の如くなれど實際上不就て見れど
謂君民同治の政事不て政府も萬民の政府政府の仕
事も萬民の仕事といふ議論が着實な行なれ最早今
日小及ぶては年貢運上も天子様の法賄ひをせんた
め小とりする事々々といふ言を桃太郎の鬼が鳴
征伐の話一因縁不背一物語と相なりたる事でござ
るッテ只今の政府の設方を法話一ツをまづ政府
を總て太政官と唱へたれを正院左院右院の三ツ小
區別す正院も單小太政官とも呼ぶたの役所の重役

を太政大臣といふその次を左大臣右大臣その次を参

議といふあれを丁度元の内大老内老中若年寄など

に似たる役役として世の中の萬の政事を支ふる大の役役

人方の議決より行なう事で大さる左院と正院

の相談方にて重役を議長といふその下は議負書記

官などいふ役人かあり外郎政府は於て新規則を

定めんとする時正院よりその事柄をその役所へ下せ

るその役所にてその是非得失を詳義してそれを政府へ

申上ぐ又人民の政府へ建言せんとする者その建言書を

其の役所へ差出せし其の役所にてその可否を評議し

よきものを採用してまたそれを政府へ申上くる事にて大

ざうサテ外務内務大蔵陸軍海軍文部教部工部司法官

内の十省開拓使及び府縣の役所總てそれを右院と

外省と名付る役所にて其重役の事を卿といふその

次を大輔少輔大丞少丞といふ開拓使にて其重役の

事を長官次官といふその次を判官主典といふ府縣

にて其重役の事を知事令といふその次を参事と

し其外務省も外國と條約をとり結ぶ通商交易

の事を掌り内務省と日本國中乃人口戸数乃取調べ

貧窮人の救助道路堤防の普渡物産乃世話郵便の通

達ホリス乃事務などの事を掌り大蔵省も貨幣紙幣

の製造年貢運上の取立方及び國用の使拂などの事を

掌り陸軍省も軍掛りして器械彈藥を貯へ日本中より

兵士を召募り兵隊を組立てれを諸所は分配して不虞

の用を備ふる事も掌り海軍省も軍艦の掛りして蒸

氣船や鐵張軍艦を整へ船軍の用を備ふる事を掌り文

部省も學校を取設學問の世話を掌り役所教部省も

説教の取締をサツコウししう神官僧侶を支配しんくわんそうりよする事を掌り大低たいてい

元の寺社奉行もとは類れいたる役所やくしよ工部省くぶしやうもカナヤマ鑛山の取締こうざん管轄くわんかく

基の築造き鐵道てつどう傳信機でんしんきの建築けんちくなど總て建築製造けんちくせいぞうに係かへ

りたる事を掌り役所司法省やくしよしふしやうを總て公事訴訟こうじそしうの裁判さいばん及あ

ひ悪人あくじんを捕へて刑罰けいばつを行ふ事を掌り役所官内省やくしよくわんしやう又天子てんし

様をくわうしくわう以皇后様親王様きんしやう乃法のみはふ賄を掌り大低元たいげんの法はふ

賄方まわりかたは類れいたる役所やくしよ開拓使かいたくしも元もとの箱館奉行はこがたへいぎやう同様どうがう

役所やくしよで蝦夷地えさやち開拓の事を掌り府縣ふけんもあれを地方官ちほうくわんと

唱となへ上かみ載のする諸役所しよやくしよの指面さしづを人民じんみんの上うへに施おこなう行ふ事おこなふこと

を掌り通ふ人民の關係する役目にて大抵元の町奉行又と

法代官やとは顔ゝたる役だけれどもそれを元の町奉行又

も法代官と較ぶる時も餘程重き役柄のものでござるサテ

現今政府において一年は收納する年貢運上の金高も九

五千六百萬圓餘ありて一年は使拂ふ金高も九五千二百八

拾萬圓をかりてござるその使拂の金高の内宮内省の所

用度即天子様乃法身上に係りたる法入用は僅七拾五萬

圓にとりて餘の五千萬圓の金高もその政府の入用即人民

の仕事を取扱ふ入用でござるされば總一文とりよしも天子

様が擅せんは法ほふ使用しやうなさるゝアけも毛頭もうとうなき次第しだいよくまた
人民じんみんの難なん深ふかき厭いとむ法ほふ住居ぢゆうきよ法ほふ造ぞう管かんなどの事ことを仰おほ出いき
さる天子てんし様乃な法ほふ料簡りょうかんを法ほふ案あん一いつせむ實じつ不ふ涙なみだの大おほなる
むとありあたまきもの覺おぼえ外ナント舊きう年ねんさんおれ等の事こと
柄からを考かんへ合あされむを先せん刻こく足あし下したのむと々い理り窟くつらうう仰おほ
られ議ぎ論ろんも恰あたも人ひとを挑てう撥はつて悪あく行かうは引ひ入きりるが如ごとく切き
角かく人民じんみんの為ためは公こう明めい正せい大だいなる政せい事じを行おこなへる政せい府ふをて却かへ
て舊きう来らい乃な無む理り非ひ道どうなる政せい事じを行おこなふ志しの人ひととする譯わけ
柄からは陥おちり上ある政せい府ふの料簡りょうかんは對たい一いつ下したも銘めいくの身み分ぶんは著しやくし

甚た相満ぬ事さかたにと曉しるるで大ざらう大の故ゆゑ向後こゝろを石いし

なる心得こころえ連つらの語ことばも屹度さつと法慎はふしんとなされ一向いっさう今日の法政はふしん

事こと小服せうふく後ごして政府せいふの法趣意はふしゆいのありう大き事を尊敬えんきやう

まゝやうぢなれませ

舊平きゅうへい

なる不ふと足下あたま乃すなはち法理解はふしりかいもて只今ただいま乃すなはち法政事はふしんじのありのた

事ことをスツカリと得心とくしんもあり外ほかタツコデ僕わがもまた足下あたまの法

話わは就つてもう一いっ法聞はふきんアス大とが六むざる全軀ぜんたい足下あたまの法

話わの如くぢれを政府せいふや役人やくにんをた不ふ人民じんみん乃すなはち持物もちもの同様どうよう

なる者やゑされを蘇あさうと起さうと煮て喰うと

焼て喰うと人民の料簡次第おちるべき苦みてまた

彼等おちておれを彼是よりべき勛をならん事おそん

ト弁されと今世間おちてあつらさまお政府を誅罰し

或は役人お無禮をあたふ者おれを彼等おち中へ承知

せむして忽ちその人を捕へ罪科お行ふ事おれをおれ

を以て見れを失敬なつら下乃作らる所を火爐無法

畠水煉たゞ口丈乃和口はて畢竟よりべしと行なれべの

らざる伝議論おささりませう且是下の伝話よりよれ

を政府や役人も丁度人民の奉公人と同様は心得られ外

ソデ又世の有様不就ておらんやされ自給とり官負様と

聞か誰も彼も之を低頭平身して且那様は持佛様と

尊敬して法髯乃塵を拂さざる者なきが如く官負様を

また人民を以て自己の家畜へる犬猫同様は心得去

れ小對する時も恰も護護の袋の如く瘡たる面を慢に

脹らかしその威勢を示さんとする次第でござる何れ

銘々乃使ふ奉公人をかくの如く尊敬する筋もたられ

むまた如何程横著なる奉公人といふとも主人は對し

かくの如き無禮を働く者も大ざり外まひさぬれを
 どうしても是下の仰る所をありをかりあて推量
 小相違ふさりませんさりながらも——是下乃法語——
 が正真の筋合を知らぬる人民のためにも大の上も
 なき後楯ふて韋駄天が尻推を——仁王様が加勢を屯
 るよりな不氣丈夫も覚え法觸や法常告を守らんと
 もよ——年貢運上を拂えんとよ——兵隊とかりて重き
 錢砲を擔けずともよき事ふ——ても——大れをやらす——
 うり役人があらむ直に事公人と主人乃道理を以て一言

の下小いむ伏せなるかれおれ言募らむ暇を使ま
ての事也又實小人民のためにも便利にも重宝にも
いそんうたなきありうたき話一でささるサテ
ソコデかく一
て見れむかの政府や役人が人民を捕へ罪科不行ふ
事を語り執ふ乗一我物顔ふその權威を振ふけで
むざりませう何ふせよ是下の法話一を世の有様ふ
引合し見れむト合点のやのぬ次第でぶぶるまづ
それ等の論をききききききききききききききき
の筋合なれむ人民をかたくる一き法觸や法布告を守

る心配しんぱいもなく骨ほねを折やぶて稼かせたる銭ぜにを年貢運上ねんぐんえんじやうのため
みとり立たてらるゝ憂うれひもなくイヤナ兵隊へいたいとなりて銭砲玉ぜにやうぎやう乃
的まととなり苦勞くろうもなされを六ろくの上うへもぢきありのたき次
第だい小せうて六ろくれを聞きか人ひと々々定さだて年寄としよりが初孫はつまゐを儲もつけ
る如ごとく雀躍はなはたししてよろ大ぬ事ことでござらう

開次郎

イヤ舊年きうねんさんおまへ乃なり不理窟ふりくらさどうも手てが附つられぬ
やうに覺おぼえ外ほか即右すなはちみぎといへむ左上ひだりうへといへむ下したといふ如ごとく俗ぞく
小物戾せうぶつといふも足下杯あしその事ことでござりませうさりながらあれ

よき物事の道理を法吞込なりぬるを急なれむまた深く

咎むべきことども大なりまやん僕もかく法語しをちかけ

上からいづるまでも是下の得心なりきるまでを決して

止めぬ心得でござるサテ是下の法論でも政府や役人を

人民の政府や役人なりぬるを急なれむと起さうと人民の

料簡次第よりて決して彼等より於てそれを違背せ

きまけちなき苦なりそれを年貢運上も拂せぬともよ

からん兵隊とやらにともよからん法觸や法布告を守

るもいらぬ仕事と仰するまけがあれ大なり心得違

俗しやうにいみやふ敷まじ小こ蛛か手て横よこ紙かみ破やぶりの議ぎ論ろんでおさるさ折せ人にん間かん乃なり

身みの上うへにい權利けんりと義ぎ務むといいふふてた恰あたもも車くるま輪りんの如ごとく何なに事こと

は付つても並ならびなてな行いく者ものがある事ことをありたしれま

せ壁たふを物ものの商あき賣うの上うへに付つていへな商人あきうりも代だい料りやうを受うく權けん

利りある也やえ品物あやものを液えき中なかつ義ぎ務むあり買か入いるも品物あやものを受うく權けん

利りある也やえ代料だいりやうを拂はらふ義ぎ務むありまた主しゆ役やくの上うへに付つてい

へなまま人にんも奉ほう公こう人にんを使つかふ權けん利りある也やえ給金きふきんを拂はらふ義ぎ

務むありまた奉公ほうこう人にんも給金きふきんをとる權けん利りある也やえ主人しゆじんのた

めは傷やうく義ぎ務むありおの道理どうりを世よの人の萬まんの仕事かじは志し

たかむて須臾も離れぬものでござる。今宵の上理をよ

々お考へられねども。人民と政府との間柄をさぐるに曉

る事ではござりませう。今世間乃人が夜分雨戸をノタ

表乃戸をノタカと吟味して先されで用心よりと落つ

き。臥戸に入る事でござる。ッデその用心を如何なる

ものと考ふれむ。四手板一投志おも裏表からけつりて、か

板一投ケ一大きなる屁を放ても響き裂るゝ位のもので大

さるかる不用心の物を頼みて大斬盗賊の憂なり。白

川夜船と寐てゐらるゝ。則政府が法律を以て世と治

むる也急でござるあれを自己おれの山やまだあれを自己の田地でんち

と一里いちりも二里ふたもなれたる場所かよふまでおきて往ちか一人

あれを奪うばひとる者ものなきを則すなは政府が法律まりつを以もつて

むる也急でござる自己おれの家えを蔵くらが十とへ地面かえが

有金ありかねが十萬兩おふまんりやうあれを酒池肉林しゅちにくりんの中うちに楊妃やうひ

や小野小町おののまちを揚該あかづかふまとも子孫こそん代々たいたい貧乏びんぼうする

とありとあべあべいてゐるも矢張政府が法律まりつを以もつて世

を治をさむる也急でござる自己の時計とけいも立派りっぱだらう自己乃

衣服きものも奇麗きれだらう自己の妻めかけも好女よめだらうと人ひとに講かたて

あらうも到底政府が法律を以て世を治むる由きて
大ざるされども一上は政府とく人民の取締を怠る者なく
む世の有様をどんなものでござりませう大方強い者勝
ゝて人衆盜賊至らぬくまひなき事ならんと存し外
されば時計を所持する事以覺束ちし衣服を着用する
事以覺束ちし妻と鴨乃樂しきもかゝる事ら覺束か
き事をして金限財宝山林田畑何一つといふとも自己の
物と安心して存貯するを決して覺束なき事ではござ
る蓋し大の事を知らんうも昔の乱世の時を引合ひ出

さばとも今より八年をかり以前幕府の亡かたる頃の
有れ不就て見れもよくかかる事うそその頃の事を考
ふれも今更身の毛が戦栗やうは覺え外ナント舊手さえ
此等の事をお考へとされちを政府乃恩徳を實に廣大
無邊のものとお得心がまゐりまゐたらうッコデ人民一般
小かくの如き恩徳を政府よりうくる權利あれをまた
この恩徳の報ゆる義務即つとめといふがなくてはか
ちをぬ苦てさざるさるふ旦下の成論でも恩徳を飽き
うくべしあれも報ゆる義務をせぬといふはけなれを

物を買ふとも代料を拂ふぬ奉公人を使ふとも給金
を渡さぬとも如く我儘とも手前勝手とも譬方ちき
無理窟ふて難いかる無理窟小信服する者も大ざり
外まいサテ人民の國小對する義務をその數甚だ多く
て悉く大れを算へ盡さるとあたふれどもまづその
中乃至たる者をあぐれを第一小國を尊敬する事第二
小法觸法布告を堅く守る事第三は年貢運上を拂ふ
國用を資くる事及び兵隊となりて國を守護する事
て大ざるもの三ヶ条よりしてその他百般の義務を生

さる事柄を大の二条の事柄だよくさるく曉れをそ
他の事柄もあのづから了解せらる事ではさる第一は
國を尊敬とて國の政事政府及び役人等を尊敬
さる事でさる何を以てそれ等のものを尊敬さる事と
いへばさるも話し申タル通り元來政府を人民より
減主とのよりて一般の人民が各々その所持の權を一分
づ出し合ひ出来たりたる者かれを政府を人民の政府
政府の權を即人民の權政府の行ふ政事を即人民の
行ふ政事大の政事をとり扱ふ役人も即人民の代理人とて

大の役人の身躰を銘に乃身躰と因取らるるものであ

ざる凡人間と生れて自己の心思身躰を大切と思はざる

者もなき筈にて自己の心思身躰を大切と思ふ者もま

たその心思身躰より顯えり、權とりよもの、集り合ひ

て成立たる政府を大切と思ひ尊敬せざる者なりき筈

でござるさるふも、あれも一國を輕蔑する者あらむ

あれ自己の心思身躰を輕蔑する筈や、その人も大方

氣違ひ乱心者なりて本氣の沙汰でござり外すられ

を誰よりもその道理たふ香込むを國の威光を我身の威

光國の衰弱を我身乃衰弱樂しとも悲しとも痛きも
痒きもこな我身乃上の事と思ふ也自然は國を愛
する念も生れ政府や役人を道理に従ひて尊敬せし
るは至る事て大さるかく國を愛せ或は國家を大
切と思ふなり之を大さる仰山は問われども畢竟我
身身を尊敬してこれを大切はせざる過ぎる事では
なカテその次乃法觸や法布告を堅く守るは其をすて
法話しパス過り政府にて政事を行ふを不銘くして
行ふと同然なれむその法觸法布告を守るを恰も銘く

の言葉を守りし同族なる事でござる。さるゝおそれお
互に法觸法布告なりと背く事あらむ。譬をさぐら
好て人と約束しまたさづからほいさす。おそれ破るゝ如
しその約束せる人もおれを何とふやかぢうに違
因族なる馬麻者といひて譏るゝ。さざらうされむ。銘
り言葉同族なる政府の法觸法布告をまた銘より
破るゝとまれむ。尻口あらぬ所業也。おれを取扱むる
政府もまたおれを氣違同族なる馬麻者といひべし。且お
かる馬麻者も少し位横著るゝとをすともよも氣の附大

とさあらトとの見込より常々無理非道なる政事
を以てあり伏するふ及ぶふとて畢竟おれ銘々乃自業自得
身から出たる舖を一言半句の苦情もいへんやう
なまゝして實は是非なき次第でござるおれふよりて
考ふれぬ公明正大の政事を受くるも無理非道の政事
を受くるも銘々乃糾簡一その言彙を守るとやら
ぬとの除ふあるふとせられを後觸法布告などを守るを
人民乃大切なる義務とせいへど更に深く論ずれぬ銘
々乃幸福を導きへき道でござるさうながら此の義

務小付てともう一つ心得おく事があり升全幹政府の

法觸法布告を銘々乃言衆同ねぢうといへどもおれ

を銘々乃口より出してせぐ小その身軀にて行ふも

のふあらずされ中ふを銘々乃心小適もぬも又も

銘々の安穩小害あるもあらぬおとでたさる且人間を

権勢あれを必びその目下日向て手前勝手手前勝手の仕業小

及ぬもの小て主人を何時も奉公人より手前勝手手乃

仕業多く亭主を何時も女房より無理ぢう仕業の多

きが如く人民の権を一纏ゆて預れる所の政府ぢ

れむその權勢を恃たのみて自然しぜんに私の心を生はす遂つひに無理りひ非道ひどうの暴政さうせいを以もつて株主かぶたる人民じんを羣むくとり扱あふ

もまゝある事ことでござるも一ひとの時とき不當あたうて貴君あなたの

法は無理り非道ひどうとその暴政さうせいに従したがふとすかれ堂々どうどうたる

議論ぎろんをお立たてその無理り非道ひどうなるを辯駁べんさくしてその

改正かうせいを請まをふべしあれまた人民じんの權利けんりでござるされど

大れをするは道みちあり決けつして過激くわききならぬやう温順おんじゆん

柔和ろわの道理どうりを盡つくして大れが改正かうせいを求もとむべし一ひと徒と

党とうを結むすぶ一ひと揆けんを起おこし謀叛むはんの類るいたる所業しよごふを以もつて

れも所謂理を以て非なるもの陷りや不さるべき政

事を以て苦めらるゝに至るでござらうとの故に政府

よりその権勢を誤用して暴政を行ふとありとも

決して粗暴過激の所業に及ぶやうよく前後を

省み誠實の道理を盡して改正を求むべしとあれまた

その権利中の義務としてわれ等の理合するた銘々

その心中に會得してゐられなかつたものとでござ

るやテその次の年貢運上を拂ふ國用を資くる事及び

兵隊とかりて國家を守護する事の道理をきで初

編み控へこてくもしくは話わしつたれを今いままたあつてあら
ためて話わしつたむともは得心あはれこころなつてゐらるゝ苦くるしみで
むざる但たゞ古ふるの義務ぎむふ付つても老婆心らうばこころふと一ひと言ことそへかく
まとかまざるまで小初編せうそへんふも話わしつタル通り年貢
運上うんじやうを拂はらふことも銘めいくの仕事を政府せいふふたのみふそ
の入用いりようを拂はらふにやれどもその筋柄すぢがらを大工だいこうふ家作かさくは
を任まかしその極きよくうちの賃銀ちんぎんを拂はらへも最も早はや務ごやうとを
了事りやうじなるとも大おほいなる相違さうゐを元來がんらい政府せいふの仕事しごとうとて
銘めいくの仕事しごとやれを夜よるも晝ひるも雨あめ乃すなはち日ひも風かぜの日ひも飯いを

食くふ間まも寐ねる間ひまも影かげの形かたちふそふ如ごとく銘めい々の身み身み不ふ

あたがゐて須臾あきらも離はなれぬものでござるされむその入い

用もちを拂はらふもまた一身いつしん一家いっかの身上しんじやうを賄まわふと同どう様やうて大

れんど拂はらへむぎふ足たれりとりし際限さいげんもあるふとや

則すなは恒とこふ事ことと次第しだいふよれむ銘めい々の家庫けいこ家財けざいを擧あて悉しつ

くあれを年貢運上ねんきんうんじやうふ差出さしださん心組こころぐみふてゐられもかな

もの苦くるてむざる蓋けだふの理合りあひを國くにと銘めい々の要係えんがひふ

付つて考かうふれを恰あたも火ひの光ひかりを見みる如ごとく明亮めいりやうふ會得えとくせら

るふとでござるサテワコデあれ等らの義務ぎむを銘めい々たい國家こくがふ對たい

一つとあるやゝ銘々もまた國家よりその身を保つ所の
権利の保護をうくる株があり銘々その身を保つ所の

の権利もその區別甚だ多き者やれどもうゝはそのあら

うゝを法語一々さむまゝの第一を自身自主の權といふ

即自今を一人主の人間にて我身も我身の旦那様やうや

ゑ他人は害を加へ世間の法を犯さぬときへなくを決

て他人より押へ附らるゝおとなきを以て第二を行事自由

の權といふ即長崎の人が東京へ引移らんと大坂の

人が箱館へ旅行せんとも世間の校の違背せされを決

して阻さまたちらるゝあたなきを以もつて蓋おほふの權あきらを最も廣ひろ

きものひて隨意なるいは我好おほむ職業しぎふを營をさみ隨意なるいふ我好おほむ

連中れんぢゆうと仲間なかまを結むすぶなりとすべて人間にんげんの隨意なるいふその行為ゐえい

を行おこふ大おほともなひ大おほの權けんの内うちに籠こもれるおとで六むの第三だいさん

を意思いし言語ごんご自由じゆうの權けんといふ即すなはち世間よこの害がいとならざる大おほと

も隨意なるいは考かんがへ隨意なるいふ言こと頭あたまして着き支しぢきを以もつて蓋おほふ我われ

好おほむ神しん佛ぶつ宗旨しうしを自由じゆうは信しん行ぎやうや或あるは我われ著作しやくさくせし書しよ

を自由じゆう不出いっしゅ板ばんするおとなきも大おほの權けんの内うちに籠こも

れる大おほくで六むの第四だいを物品ぶつひん自由じゆうの權けんといふ即すなはち我われ所有しよゆう

の品物を以て息子に譲らんとし親類も大人とも貧
窮人に施さんとし開山札を事納して坊主の腹を肥
さんとし我心のまゝに取行ひて少くも差支なきを
第五を請願自由の権とし即他人より無理非道をく
る時をあれを裁判所へ訴へその曲直の吟味を以て
もらふたを得る權利としてすべて他人のためは我權利
を枉屈せられんとする時政府の力をかりてあれをお
し伸し安全を得る權利を以て但しこれをあらましの
話にしてそのくせしき事を中々無智短才の僕風情か

横板^{よこいた}の館^{あや}を抛^な附^つくるか如^{ごと}き弁舌^{べんぜつ}を以^{もつ}て解^と明^{めい}さん大

と思^{おも}ふもよら^ず然^{しか}れハな不^ふそのくそ^しき事^{こと}を教^し導^{どう}

職^{しやく}乃^{すなは}フルナ尊^{そん}者^{じゃ}か洋^{やう}學^{がく}者^{じゃ}のミル先^{せん}生^{せい}みで付^つてお

き^きち^ちき^きき^きせ^せが^があ^あか^か只^{ただ}今^{いま}法^{はふ}話^わ一^{いつ}パ^パタル道^{どう}理^りがよ

う法^{はふ}胸^{ちゆう}ふをひり^{ひり}をい^いち^ちある一^{いつ}お^おて^て属^{ぞく}を知^し理^り窟^{くつ}

よ^よて^てお^おの他^たの事^{こと}柄^{ぎやう}も大^{たい}低^{てい}おで^であり^{あり}お^おち^ちらん大^{たい}と^とふ^ふん^んど

外^そテ^そお^おの授^え利^りとい^いふ^ふえ^えい^いを^をや^やる^る株^{かぶ}とい^いふ^ふと^と同^{どう}様^{やう}小

て^てお^おの株^{かぶ}を^を九^く人^{にん}間^{かん}た^たる^る者^{もの}金^{きん}銀^{ぎん}珠^{しゆ}玉^{ぎよく}を^を鏤^{ろう}め^めた^たる^る法^{はふ}殿^{てん}お

住^{すま}居^ぐせ^せる^る殿^{てん}様^{やう}も九^く尺^{しゃく}二^に間^{かん}乃^な裏^{うら}店^{たり}お住^{すま}居^ぐせ^せる^る日^ひ雇^い稼^{かつ}

もてな同等^{どうとう}に所持^{しよぢ}してゐるべき筈^{はず}でござるされど政^{せい}
 府^ふに於^おても貴^{たか}き殿様^{とのさま}とたりとも賤^{せん}き日雇^{ひやう}稼^{かせ}とた
 りとも少^{すく}くも偏頗^{へんぱ}の沙汰^{さた}なくこゝに同^{どう}等^{とう}に保^{たも}護^ごする
 事^{こと}として殿^{との}様^{さま}日雇^{ひやう}稼^{かせ}をえらする罪^{ざい}科^こを犯^かす者^{もの}あれ
 ば必^{かならず}に捉^{とら}ふ照^{あき}らしてそれを刑^{けい}罰^{ばつ}不行^ふふとでござ
 る政^{せい}府^ふの職^{しやく}分^{ぶん}を最^{さい}に詰^つて論^{ろん}ぜれむたゞ人^{じん}民^{みん}の權^{けん}利^り
 を保^{たも}護^ごする一^{ひと}事^{こと}に止^とりて今^{いま}政^{せい}府^ふに於^おて行^{おこな}ふいろく乃^{すなは}
 政^{せい}事^じをとなすの目^め的^{てき}を達^{たつ}せんため乃^{すなは}仕^し業^{ぎやう}でござる
 ソテ政^{せい}府^ふがたの道^{みち}理^りは従^{したが}ひて人^{じん}民^{みん}の權^{けん}利^りを保^{たも}護^ごし

て呉るくやゑまうへい舊年きうねんさん足下あたま不せよ僕わが不せよ何なん一いつ心しん配はい
と用もちろふ三度さんどの食事おきじを喰たべ安樂あんらく不あ足手あしを伸のして固こ
らる事ことでござるあれを考かんがふれを政府せいふの恩徳おんとく不よ世よ不
ありがたきものゝござり外ほかまいサテかくの如ごとく政府せいふの
陰蔭おかげを以もつて我身わがみの權利けんりが安全あんぜんなれを否いなでも應こたでも
その義務ぎむをつとめざれを力ちからないぬ次第しだいより美味うまいを喰く
ふ上うへをまた持出もつだして傷やまれをやかないぬ道理だうりでござるさ
るふ足下あたまの美味うまいを澤山たくさん喰くも人ひと傷やくふといふ少すくしい
やかりと仰おほす議論ぎろんなれを扇あふ子こ丈だけの子供こどもでもかくの

如き道理どうりは背そむきたる言葉ことばを吐はくと耻はづかしく思おもふも
 天てん擇えらむるどある舊平きうへいさん一いつて六むの議論ぎろんを言いひ
 るも實じつは飽あれ果はつ次第しだいまで六むの開次郎かいじらうも腹はらの皮かわ
 がよぢれ臍へうが糸いとをマカすやうに覺おぼえ外ほかナント舊平きうへい
 さん僕ぼくがされまて後話ごわ一いつアタル所ところを篤とくと後勘考ごかんかうする
 れたらむ人民じんみんの國家こくかは累かさねしてつむる義務ぎむとよまとい必かならずず
 ありかりなかり足下あしもとの後疑念ごぎねんを大方おほ消失しょうしつするおとでござらう

舊平きうへい

妙く開さん足下の傳話——一々道理も適當——て其の舊に
てもや一言の返答も出来ません即ち脱て降来て
六ざり升實ふ年甲斐もなくある藝者をいふかと
思へ今更何とぞと云ふ恥——して面目なき事——心得
外さりながら今乃足下の傳話——に付き僕もまた一ツの
疑を生じ外々開さん僕の如き理窟老爺乃相手にな
られタカ足下の法不運——カ——どうぞ法面係ても僕の疑をと
くどおきなされ老耄乃胸のサツパリさるやうにたされ
て下されもせ足下の傳話——でん人民が政府は墨——義

務をつとむるゆゑ政府もまた人民の權利を保護する
たとなり人民の權利をもつてゐてゐる自由自在とい
ふたゝそ政府の政事もたゞ人民の權利を保護せんた
り行ふことのよてされより不かつ目的をなきことである
といへるゝだけだか今心をあつめて世間の有様を見れば
中々足下より仰らる理窟通りふたゝゆゑ不覺之井を
の譯柄も先ボリス乃てる所業に付ておらんをこれ違
式だ註違だといふ名目を設け五十六ヶ条とやらいふ
罪目がありて違式の口を三歩より一兩二歩まで罰

金註違の口そ一朱より二朱までの罰金と恰も呉服屋が
商をさる如く罪科の虫段を正礼して定めおき法不
觸るものあれを現金掛直して貸賣時貸一切不仕
いとたちまち屯所につれおき罰金をとりあげ銭儲の
仕業をせる事でござるたゝを身躰へ割刺さるもの
あれを違式の罪人として直る三步の罰金をとりあげ肌
ぬぎ又々裳褰りして往來さるものあれをそれまた違
式の罪を犯して又三步の罰金道傍の小便さるものあ
れをア、安直の口なりと不肖よく一朱の罰金をとりあ



月
月
月



げ犬を闘いぬせし罰金ちかき紙し寫しやうを揚あぐるも罰金ちかき縛あつ任しんでも罰金ちかき

尻へを放はなても罰金ちかきヤレ罰金ちかきと罰金ちかきとちんでも慢むせに罰金ちかきをとり

あぐるあしわろがナントおれ等らを正ただ真まにらからぬ理う窟くでもお

ざらんか且かつポリスがあれ等らの法ほうを犯ひかえししものをとり扱あつかふ

垢かう子をしむ頭かしらに帽ぼう子を載いき羅ら紗しやの羽織えきに仙臺せんたい平へいの

の袴はかま官くわん負お極ごくめきたる人物じんぶつにし随ずい分ぶん丁寧ていねいに應接おうげつまれど

僕等ぼくらの如ごとく身みに荒布あらかふの如ごとき衣服いふくを著おきし中風病ちゆうふうびやうが泥ぬ

濤たうに伸吟しんぎんやううちる言こと急きふ使づかふもの小器せうきまる時ときをむや

ま小力身せうりきみかへりヒツト此方こちで立たて居ゐて相移あひうつでもまれぞそ

れさう大騷動忽ち眼をむき出〜口吻を尖ら〜耀の
やうな聲を發して呵り附け事ふれを携ふる棒
を以て足腰の主ぬんどふ打居るふしもござる。うれそ
この舊平がたじ〜見懸〜さ〜てそのたむおとふ
ポリスの所業をふく、覚えさ〜ふちるぢらも横面でも
張倭〜てやらんやうふ覺え外、劊刺も世の鷲の者
人力車曳など下賤のものが威勢のよからんため自分の
身の痛さをあらへてする仕業うて世間ふ累〜密屈一ツ
不どの妨もせざるものぢれを何もあれは付きてポリス

が罰金ちがうきんをとりあぐる筋すぢも六ざり外ほかまの誰たれも寒中えんちゆうは肌はだをぬぐ氣違きちがひもありません熱あつければさう肌はだをぬぐ大と
なれ又また裾すそがまつもつて邪魔おまひなれむさう裳えきを褰ひもとる大
とやれ何なんもあれ罵ののしの事ことをホリスがやのすくいふて
罰金ちがうきんをとりあぐる筋すぢも六ざり外ほかまの小便せうべんも出物いづつ腫はれ
物もの存ぞんをきらをさるものなれな何地どこ如何いかなる所ところもせん
とも當人とうじん乃料簡次第りょうかんしだいにてよめるべき苦人くるじんは澆瀆せうたふふと
だふせされな決けつして罰金ちがうきんをとりあげらる筋すぢも六ざ
りません況いふんや犬いぬを闘たたかし紙かみ寫しを揚あぐる事をや大れ

らるる供の樂一みぢれむ出れをやあまーういふを
子供の自由を妨ぐるまけりて最も無理なることであ
さる僕の方へでるあれ等の事柄は足下のさきよ湯
話一ちされ一行事自由乃權利に籠れることにて誰
もその料簡次第に行む聊差支なきことかと心得けり
るふかくやのまうき罪目を設けられし觸るれを忽ち
罪科は行む罰金をとりあぐるを實に無理なる譯合
よて畢竟人民の權利を害ふ理窟でござりませうされ
愚鈍の僕にも更に解せざる次第でござるまたホリス

のせる職分を國の政事乃一つたれをボリスも矢張政府
ふて人民の控制を保護するため乃道具でござりま
せう且ボリスも給金を國用乃中より受くれむ矢張
銘より出ま所乃年貢運上の餘澤を蒙るものでござ
りませうその故に掌る所よりて威權あり異なれ昔
一乃番人或も番太ちとてふもの大抵似寄の品物と
心得おさるは今のボリスも政府の威光を笠は着て主
人同振やう人民を塵芥の如くみ看做し人民の控制を
保護せべき道具てありながら反てそれを害ふ仕業は

及べるも實小胆乃つぬる話一よてあきれて口を閉
く大とか出来はせん人民をまた我養ふておく奉公
人の對一貴君極且那極と致さ恐れ入り外々以來尊
を附け外と倅入り、あかのくぢらに我料簡の儘小行を
てよき苦ぢる權利を害する、み至れるを諒ふり、飼
犬小手を噬る、口けめて甚だ歎あより、き次第小覺え
外尤ボリスが出来てから以來火附盜賊の憂も減一追
剥人殺乃難も少くぢうたれをボリスを以て決てあ
きものよまる、口けでゐる、大ざらぬ随ふよきものなれ

いまた人民の權利を害ふ所を以て見れを一概によき

ものとせしむるに及ばぬやきません薬も變じて毒とせし

如くポリスを全轉よきものなれども政府の威光を笠ふ

著てあまり力身をさぐる所から竟ふあきまのふなれ

るふとておさうませうまづあれ等の論をきておきき

ると足下の法話―おされ―法議論よけれをかの五

十六ヶ条をどうぞ罪目と大低人民の權利を害ふ事柄

相違なくして政府のすべき仕業ふあらざるかと心

得られぬさる故に又の舊平をあれより従来ある時を

必^{かならず}む裳^{もも}を褰^{あき}りポリスを見掛^{みかけ}ぢやをぢ不^ふりきと鼻^{はな}秋^{あき}を
うたむ小便^{せうべん}でも去^さてやらん心組^{こころぐみ}でぶさるその時^{とき}ポリス
が咎^{とが}めなむそれより喧嘩^{けんか}の志^しどきぢれ足下^{あたま}より少^{すこ}たる
理窟^{りくつ}を以^{もつ}て議論^{ぎろん}ふ及^{およ}むそれをも用^{もち}る罰金^{ばつぎん}をとら
んといふポリスをおろか恥^ち辱^{じやく}でも裁判^{さいはん}所^{しょ}ても恐^{おそ}る
事をぶざりません何^{なん}辱^{じやく}すでも足下^{あたま}より少^{すこ}たる理窟^{りくつ}をお
しりたり去^さの老爺^{おやぢ}の身軀^{からだ}に細粉^{ちぢみこ}はぢらんとも更^{さら}ふ引^ひを
とらぬ覚悟^{かくご}で去^さざるその時^{とき}も関^{かん}さんおまへも議論^{ぎろん}の張^{ちやう}
本人^{ごんえ}に死^あちとせむ小屹度^{せつと}尻押^{しりおし}をお頼^{たの}みりシ外^{ほか}ナント

閑次郎さん今僕の法結——ス所もチツトモ無理のなき理窟でござりませうされども法の議論に向ては如何なる天魔鬼神とふとも必に侵入り平作して頭を抱へ逃出さんとは心得られ外ソコで足下の法所存をいかにでござる

閑次郎

アハ、舊平さんまたうまく不理窟をお考へなされたとされども足下の大分議論も上手なわたりなされども無法なる言葉もとうか前後とのむて正真の理窟らう

聞^{きこ}ゆるうちが奇妙^{きせう}ださりながら其のやうなる事^{こと}を世^よ間^{かん}

の造^{くろつ}黨^{たう}番^{ばん}に向^{むか}ひて話^わしよと人^{ひと}と呼^よれて正^{せい}真^まふ

息^{いき}の音^ねの通^{とお}ふ者^{もの}を耳^{みみ}ふとめぬ言^{こと}葉^はでまざる全^{ぜん}解^{かい}足^あ

下^まのかくの如^{ごと}き不^ふ理^り窟^{くつ}を吐^{はきだ}出^だを根^{こん}原^{げん}を僕^{ぼく}の話^わしよ

自由^{じゆう}を勝^{かち}手^て我^{われ}儘^{まま}のちと誤^{あや}解^{かい}してゐらるゝと云^いわれを

其^{その}誤^{あや}りを正^{ただ}さんよとまづ人^{ひと}間^{かん}乃^{すなは}ち自由^{じゆう}のよりて起^{おこ}る本^{ほん}原^{げん}

を話^わしよとされを話^わ得^{とく}心^{しん}ふなり外^{ほか}まふ其^{その}故^{ゆゑ}ふとり

約^{つやく}てその本^{ほん}原^{げん}を話^わしよとせう元^{げん}來^{らい}人^{にん}間^{かん}の性^{せい}来^{らい}はれ

付^つき屹^{まろ}度^ど善^{ぜん}をさすべき苦^{くる}ふ出^で来^きてゐるものにてされ天^{てん}

道どう様さまが人ひと間まは與あたふる天てん性せいでぶざり外ぐわい六りくの天てん性せいの傷きずを

名な付づて知ち覺かく分ぶん別べつと尸すい外ぐわい即すなはち白はくきを見みて白はくとあり黒くろ

きを見みて黒くろとあるとてうれし矢や張ちやう天てん性せいより顔あはを

ふふとちから生うれし人ひとも六りくの天てん性せいの上うへを私わたしと

り雲くも霧きりがあふハツキリとその光ひかりをあらう人ひとも六りくと出い

来きませんソコで學がく問もんとしふ六りくとをそれ自然しぜんふ六りくの雲くも

霧きりが退たい散さんし天てん性せいが咽おきかふちりて知ち覺かく分ぶん別べつ乃すなはち正せい真しんの

光ひかりをあらうえらるちとでぶざる譬たとへを惡あく事じを行なふ六りく

をちから無む學がく文ぶん育いくする人ひと物ぶつはあるか如ごとし學がく問もんをせ

一、そのを自然しぜんに知覺ちかく分別えべつが明あなる由よしを惡事あくじを行おこなふた

く覺おぼゆる心こころが承知おしりせむして決かしてそれをせざるべしと

でさざる玉たまみが、されを光ひかりなり人學ひとがまをされをち知しる學がく

問もんをとりもたざるは、この知覺ちかく分別えべつをみかく道具どうぐなり

てあれより恒つねに私わたしに克かち生なまれ付つき通り善ぜんを行おこなふ次あと

第だいでござるサテかく活かつ活かつしやさを知覺ちかく分別えべつを學問がくもんを

以もつて外ほかよりあーらへ付つきるもの・やうみ少すくされど決けつして

さゝあらむ知覺ちかく分別えべつをもとより人間にんげんの生なまれ付つき具ぐを

れるものゝて天機てんき生なまれ付つき或あるも知覺ちかく分別えべつなりといへど何なんカ

事面倒さいえんして六かおものやうふぢやれど畢竟ひつぎやうな心一

乃事と決心得おちろえなされて相違さうゐござりません即学問きやくもんまた

その上こまめ皮を剥く丈さかの役をまゐるものでござるサテ又人間

は手足五躰てあしごころありて世間せけんの萬物ばんぶつとの五躰ごたいも觸ふれぬるも

のあるごとと直ただなされを心こころは感かんトらるゝの情なさけとよものを

あらむ外たふ壁かべが奇麗きれいなる衣服いふくを見れむ著きたりと思ふ

美味みちみを食くへむモツト沢山たくさん食くむたりと思ふ白粉おしろいや伽羅かいらの油あぶら

の紫番ムラサキをかけも何となくその品物ものも近寄ちかたりと思ふ

えされな情なさけうていもゆる情慾おもうとりものでござる情慾

至極大切なるものより一身の幸福を得るも國の文明

開化に進む事とてな人間は其の情慾があるからる譬

を貴き人を見富む人を見うつくしき新造を見れば

其れとふたちまち羨む情をあらわし自然に勵む料

簡を起して遂にその身の幸福を得るが如く情

慾も人乃身ふとりて大益あるものなれどそのあら

るゝに任しりいさゝしむれを即ち惡事は陥る大と

心へす大あれを裁判してたとへ衣服を着なく思ふ

あれを着ては後困るぢやんと禁めモット食たく思

ふともあまり食くひても食傷おくらするなり人と禁ふめ木の品もの
物ものは近寄きよりたく思おもふともそれは近寄きよりても不義ふぎに陥おちるな
らんと禁ふめ恒とこにかくの如ごとくそのあらむる所の情慾じやうよく
を分別ふんべつして意見いけんを加へて度節とくせつとふるに帰かへせしむる
にけりあれ知覚ちかく分別ふんべつの傷きずをあらむに厭いとてたゞさ
りぢがらん人間にんげんの情慾じやうよくも中ちゆうに手強てつき者ものも急いそされとも
押おさへて節物ふしものふするはともよ不ふと心こころが大丈夫だいぢふにあらざ
れむあたまに故やまに世よを情慾じやうよくの爲ために心の分別意ふんべつい
見みて悪事あくじを行おこなふ者ものが澤山たくさんあり外ほかされど諺ことわざ小

欲^{よく}を節^{ふし}と擅^{しん}にまとの差別^{さべつ}より生^{おこ}ずるものにて自由^{じゆう}

と我^わ儘^{まま}の差別^{さべつ}もまたあるあるたゞておぼく我^わ身^み控^{ひか}て

人の痛^{いた}さを知^しれども動^{うご}ぬ諺^{ことわざ}にて今^{いま}他^た人^{ひと}より輕^{かろ}

蔑^{べつ}をうくる時^{とき}我^わ身^みを必^{かならず}忌^いむ事^{こと}は思^{おも}ふなら

んされむ我^わ身^みをまた大^{おほ}の情^{じやう}を及^{およ}びて決^{けつ}して他^た人^{ひと}を

輕^{かろ}蔑^{べつ}せぬやうなべし他^た人^{ひと}より尊^{そん}敬^{かう}をうくる時^{とき}我^わ身^み

を必^{かならず}にうれしき事^{こと}と思^{おも}ふやうなれむ我^わ身^みをまた大^{おほ}

の情^{じやう}を及^{およ}びて必^{かならず}に他^た人^{ひと}を尊^{そん}敬^{かう}せん心^{こころ}掛^かべし蓋^{けだ}

し大^{おほ}の言^{こと}急^{いそ}によれむ善^{ぜん}も惡^{あく}も自由^{じゆう}も我^わ儘^{まま}もあきら

かゝ得^{とく}心^{こころ}せられて天性^{てんせう}小^こ背^{はい}かざるや^{あまた}小^こ行^{ぎやう}せらる

みとて大^{だい}ざるされど我^{われ}儘^{まま}とて情^{じやう}慾^{よく}を擅^{せん}ふたたる悪^{あく}行^{ぎやう}

乃^{もつと}名^な同^{どう}自^じ由^{ゆう}とて人^{ひと}間^{かん}乃^{なん}天^{てん}性^{せう}小^こ背^{はい}かざる善^{ぜん}行^{ぎやう}乃^{なん}名^な目^め

うて大^{だい}乃^{なん}善^{ぜん}行^{ぎやう}が我^{われ}身^み乃^{なん}上^{じやう}にある間^{あひだ}もわれを自由^{じゆう}乃

權利^{けんり}といひ外^{ほか}小^こあらずる時^{とき}も則^{すなはち}少^{すく}も他^た人^{ひと}の妨^{さまた}げとせら

ざる仕^し業^{ぎやう}にてわれを善^{ぜん}行^{ぎやう}とよふおとて大^{だい}ざる實^{じつ}は

我^{われ}儘^{まま}と自由^{じゆう}との相^{さう}違^{ちが}ひ雪^{ゆき}と炭^{すす}との如^{ごと}くなれどまた

そのよく似^にたるおとも強^{つよ}ど波^{なみ}柿^{かき}と甘^{あま}柿^{かき}との如^{ごと}くた

れば恒^{とこ}小^こ世^よの人^{ひと}の心^{こころ}得^え違^{ちが}ひをせらるるも無^む理^りなりぬ

と不覺^{ふかく}え^ふ年^{とし}ナントかく法話^{ほふわ}アせむ自由^{じゆう}を人間^{にんげん}の天性^{てんせい}
 より出^でる善行^{ぜんかう}の事^{こと}々と明白^{めいひやく}不^ふ法^{ほふ}得心^{とくしん}かゝれりたら
 うツデ大^{だい}の道理^{どうり}が法^{ほふ}胸^{むね}小^{せう}落^{おち}入れをあれから足下^{そくか}の疑^ぎ
 せられるホリスの一段^{いちだん}ふしうありませうすつ舊^{きう}平^{へい}さんよく
 考^{かんが}へてぶらんせられ大^{だい}の日本^{にっぽん}も足下^{そくか}一人^{ひとり}お住居^{すまい}なされ
 りけてもズさう外^{ほか}も日本^{にっぽん}人^{ひと}の数^{かず}も天上^{てんじやう}の星^{ほし}より繁^{あは}く
 地上^{ちやうじやう}の沙^{すな}より多^{おほく}ーかくの如^{ごと}き群集^{ぐんしゆ}の中^{なか}にお住居^{すまい}なさ
 れる是^{こゝ}下^{した}やれむまた他^たの人^{ひと}の心^{こゝろ}をまかりてその妨害^{ぼうがい}と
 せらざるやうせねむかなをぬおとでぶざるもー足下^{そくか}が

唐太^{カラフト}が魯^ロ西^シ亜^ヤ乃^ナ果^ミなり無人^{むえん}島^{とう}てもお引^{ひき}移^{うつ}りなされ

ぢむそれより小便^{せうべん}をせんと鼻^{はな}歌^{うた}を唱^{うた}えんと裳^{もろ}を

褰^{はら}らんと喧^{けん}嘩^わをせんと火^ひを附^つんと盗^{さく}賊^{ぞく}を傷^やみ

んどか一人^{ひとり}を尋^{たず}問^{もん}もて他^たに笑^{わら}ふ人も腹^{はら}立^たくとなきふとや

えお心のすふちなれて差^さ支^しぢみる人^{ひと}けれども日本^{にっぽん}の如^{ごと}き

人間^{にげん}群^{ぐん}集^{しゅう}の土^ど地^ちはお住^{すま}居^ゐなれたるあかだを決^けして豆^{まめ}下^{した}

の清^{せい}話^わのやうなる行^ゆかた出来^{でき}ざる苦^{くる}でみざる今^{いま}六

れ字^じの事^{こと}柄^{がら}を喻^{たと}えとりて清^{せい}話^わよりさか人民^{じん}たる不

庭^{てい}前^{ぜん}の生^{せい}か主^ち樹^{じゅ}木^{ぼく}の如^{ごと}く政^{せい}府^ふをみれを守^し護^ごする庭^{てい}

作り種樹屋の如きものでござる樹木をその性来通

り生長さすべき筈のものなれども或を切りまくる枝を

ちみたりて他の樹木の妨害をせむ時またまち庭作り

種樹屋の鋏鋸を受けてその枝を切りとらるる次第で

ござる政府が人民の身の上を算係して人民の権利を妨

ぐる中々不覺ゆるふとあるも畢竟法の道理を照らして合

せれを合点ゆくおとでござる日本の政府も一人のため

に設けしものふあらん則日本國中のためふ設けしもの

なれば政府もまた日本國中の人民の互に損害を受け

ざるやうにその權利を平等に保護する次第にて其の事

となす親が子供をとり扱ふが如く其の兒もかの兒も

こな同様に思ふ物を與ふるも小言をいふと決して偏

頗の心となすも固より親の眞實の情なれをまた政府

の心で決する其の心からして是下の疑ふ所の五十六ヶ条を

どうし罪目も起りホリスの權ホリスの職分も起れる次

第で決するかの五十六ヶ条を載る所を決して人間自由

の權利中ニ就れるものはあらんとな人の氣随我儘と

りあらざるも所業で決するまかれは其の譯柄をさきよ

足下の仰れあふき 劊刺裳褰かりものしるしをり小便せうへんなどの事こと不付ついでては

話せうしさん全躰ぜんたい人の身躰みからだを天道様てんどうさまが世よの務つとめをさ

さすべきため小作つくられしものにて親おやより自分じを受うけ自分

をまた息子むすこの偕つたふべき大切たいせうなるものでささるさるを劊あ

刺さを針はりを以もつて皮膚ひふを突つきそれを五色ごしきに移うつりて恰あたも錦

繪えの如ごとくさるふとわれむその天道様てんどうさまの思召おもひづは憐いとれるを

勿論もちろん身躰みからだ小大害さいがいある證據しるしも立てし劊刺かりものをきてある年とし

寄よりの大方癰瘋おんぷんなどの病やまを發はするを以もつておありな

れませかる大害さいがいあるふとを捨置すておを世よの馬廐ばかい野郎やろうども

もその奇^{さい}廉^{れい}なる小^こ眼^{がん}をくらみ威^い勢^せがよいの女^をが不^ふるゝのと噪^{さう}

き廻^{まわ}り竟^{つひ}に一人^{ひとり}の風^{ふう}が千^{せん}萬^{まん}人の害^{がい}を引^ひ起^{おこ}して世^せ間^{かん}に生^うれ

し付^{つか}ぬ片^{かた}輪^{りん}痴^ち人^{にん}が殖^ふゆる大^{だい}と云^いふ政^{せい}府^ふにてあれをやあ

まゑ

すし禁^{きん}制^{せい}あるにけで大^{だい}なる又^{また}人^{ひと}間^{かん}の道^{どう}理^りに適^あをたす

れい

まゐ

え

つき

ま

ち

し

ま

禮^{れい}儀^ぎ作^{さく}法^{ぽう}も則^{すなは}人^{ひと}の天^{てん}性^{せい}生^{せい}れ付^{つき}より生^{せい}きる所^{ところ}のもので

かゝる故^{ゆゑ}に人^{ひと}に對^{たい}し無^む禮^{れい}を勵^もむにあらぬ已^{おの}の天^{てん}性^{せい}は背^{へい}

ふ

ま

え

ふ

ま

ち

し

ま

きたる我^{われ}儘^{まま}氣^き隨^ずの所^{ところ}業^{ごう}を行^{おこな}ふもの相^{さう}違^ゐひありませ

た

ま

え

ま

ち

し

ま

ち

し

人^{ひと}壁^{かべ}を足^{あし}下^{した}の前^{まへ}より肌^{かわ}を脱^だぎ脛^{すね}を露^{あらわ}しなから相^{あひさ}接^{せつ}する

た

ま

え

ま

ち

し

ま

ち

し

ものあらを足^{あし}下^{した}にあらを失^あ禮^{れい}なる奴^{やつ}と主^{しゅ}腹^{はら}せらるゝ

でござらう且足下も夫の不作法より竟ついにその人を尊敬そんみん

わうえん

うせおて

じりぞ

おに

する料簡も失果る事であらうされむ道理上は於て

さきぬ

あうちと

あれい

る

たえ

うぐ

ひきあ

え

肌脱ぎ裳褰りの失禮より遂に他人の主腹を引起し人

ん

あうちと

あれい

る

たえ

うぐ

ひきあ

え

間交際の妨礙を生むるを必すあらんおとし心得られ外

ん

あうちと

あれい

る

たえ

うぐ

ひきあ

え

去ぬるを何ぞや家の中のみならず往來するが肌脱ぎ裳

しを

あうちと

あれい

る

たえ

うぐ

ひきあ

え

褰りまともあまりといへむ歎きし所業にてある所業

しを

あうちと

あれい

る

たえ

うぐ

ひきあ

え

を行ふもの獣愚白癡もまたふまてはわざりません蓋し

ふんや

あうちと

あれい

る

たえ

うぐ

ひきあ

え

あれ等も古き悪習よりあれまては誰もあまり字が附す

あう

あうちと

あれい

る

たえ

うぐ

ひきあ

え

怪にもせざるべとなれども今日かく世の中が知らけ人

あう

あうちと

あれい

る

たえ

うぐ

ひきあ

え

徳を尊たかしめみ行なむを重おもんむる時ときに當あたりて甚いだ世間よの

風俗ふうふくを害あやふと云いふまた政府せいふに於おいてあれをやなままし

禁きん制せいをしりておぎるむ職業しきぎふをしる時とき或あるは雨降あまふりの

日ひやはと肌脱うでぬぎ裳褰ちりもをりせねむかぢもおぎるはとあれとも

あれも衣服いふくの制せいのありきとあらうてあれを以もつてはの禁きん

制せいを咎とがむるはけよもぢきません即すなはち初編しうへんは清話しやうわ一いつパタル

衣食住いしょくぢうの論ろんをよも考かんがへはらんぢうされませ又また大道だうだうの真中まなか

仁王におうと突つち他人たにんの鼻前はなまへへ馬うまの如ごとき陽物やうぶつをあらはし

慢然まんぜんと小便せうべんを排は出だした實じつは不作法ふさくはう千萬せんまんぢう仕業しぎふにて

大の事ことが始はじて見る所ところのものぢらむ誰たれもてゝ必かならずに胆きんを
つぬし失禮しつれいを怒いかり終はつふ喧嘩けんか口論こうろんもでも及およぶべきこと
でござらうされむ便所べんじょふあらざる所ところふ便せうするを禁制きんせいする
るもふ不肌脱ふきだつぎ裳褰しやうせんりと同族どうぞくする理窟りくつでござる犬いぬを
闘たたかへ大なる紙鷲たふしを揚あぐるおとを禁制きんせいするもまたあれが
ためは往来人わらいじんの妨礙ままたりを生あずるやゑてござるは他た五十六
条じょうふ載のする所ところもろく人の象しやう随我儘きずかより生あずる悪事あくじは
てあれを犯とすものふ政府せいふより相當きやうきやうの刑罰けいばつを與あたふるを勿な
論ろんなれどもあれ等らも裁判所さいはんしよふ控おて入牢にゅうらう或あるも懲役ちやうえきぢど

小行ふべき不との罪もあらにさうして捨置てをまた

世間の不為とぢるるにやれむ無據罰金の直段と定め

おきかれをとりあぐるおとでさがるされを足下のゆる銭

儲の仕事をもつて筋を決してなき事でさがるサテおれ

からホリスの権乃素性とホリス乃をべき職分とを話話

ーヤさん元東ホリス乃控をかれを警保の権といひて日本

もて内務省の受持でさがるコテ大の権の素性をも人

民の身の上を氣を附け安全に守るといふが趣意にて

警保の文字をくなく説きふ言誠めたもちまゐる

といふ義理^{ぎり}を警保^{けいほ}の權^{けん}とてまへて人民^{じんみん}の身軀^{しんたい}所^{しよ}
 業^{ごふ}の上^えに罪係^{ざいけい}して人民^{じんみん}が自己^{おのれ}の身軀^{しんたい}に害^{がい}とあるべ
 き事^{こと}や他人^{たスん}の權^{けん}を妨害^{ぼうがい}すべき事^{こと}を行ふ時^{とき}を忽ち^{たちま}
 いまめ不言^{はふご}をいふ或^{あるみ}を氣^きを附^つけ説諭^{せつご}してその安全^{あんぜん}
 と守護^{しゆご}する義^ぎでまざるまれふこれを政府^{せいふ}の人民^{じんみん}に向^{むか}ひ
 て大^{おほ}の權^{けん}を行ふ有^{あり}ねとなし親^{おや}のその子供^{こども}をとり扱^{あつか}ふ
 と同^{どう}ねなるが如^{ごと}く今^{いま}子供^{こども}が危^{あやう}き遊戯^{あそび}をまねを怪^{けが}我^が
 をあるやらんといふため菓子^{かし}を多く食^くへて疳^{かん}の出^でが起^{おこ}
 らんといふむるをされ親^{おや}が子供^{こども}の身軀^{しんたい}を大切^{たいせつ}と思^{おも}ふ

眞實の情^{まこと}ふて政府^{せいふ}もそれと同^{どう}様^{よう}に恒^{とこ}ふその眞實^{まこと}なる
情^{まこと}を以^{もつ}て人民^{じんみん}の理^りの背^{そむ}き道^{みち}に違^{たが}ひたる行^なを遏^{とど}むる
を固^こより當然^{たうぜん}の仕業^{しごふ}でせざるなりながら親^{おや}のやうま
まぐるを竟^{つひ}ふ子供^{こども}を馬鹿^{ばか}者^{もの}ふまる如^{ごと}く政府^{せいふ}のやうま
まぎて人民^{じんみん}の尻^{しつ}を放^{はな}たる事^{こと}ふまで関^{かん}係^{へい}するをまた
人民^{じんみん}を馬鹿^{ばか}者^{もの}ふまる本^{ほん}なるゆゑ政府^{せいふ}もては此^{これ}等^らの事^{こと}
柄^{がら}に深^{ふか}く心^{こころ}を用^{もち}ゐる既^{すで}に適^{てき}宜^ぎの良^{りやう}制^{せい}を設^まけられ、あ
る事^{こと}でせざるがテ又^{また}ホリスア職^{しやく}分^{ぶん}を大^{だい}の權^{けん}より出^いづる
所^{ところ}の者^{もの}なるゆゑたとへ五^ご十^{じう}六^{ろく}を条^{じょう}に載^のせざる所^{ところ}なりと

人民の安全あんぜんに害がいある事をホリス不ふおいて必かならず以もつてこれ
を制止せいしすべき筈はずでござるされども又また附つ盜賊とうさく乃すなはち番ばんを勿なほ
論ろん道路だうどう橋梁きやうりやう乃すなはち破損はたんを事を附つ市し食物店じきやうてんの賣物うりものに氣き
を附つけ奸商かんしやうのメ買一賣かひいめいやむに氣きを附つけ寄芝居よせゐ妓樓きろう
その外人がくじんの大勢たいせい群集ぐんしゆする所ところに不ふ作法さくぽうのやからんやうに
氣きを附つるを僅わずかにその職務しよくむくの庁端ちやうたんにて首くびを縊くどらんと
する者を遏とどめ身みを投なぐんとする者を押おへ津河つがに落おち入い
りてゐる者を救きうふ車くるまに壓ひれんとする者を助たすけ子供こども
の危あやき遊あそ戯びを制せいし往來かうらい人の鼻歌はなうた唱うたふを誡いさめむると固こと

よりその職務の中ちに就つれる事ことでおささるるポリスポリスを事こと

宜なよよれれを夫婦喧嘩けんかの中なかに立入たちいりその取扱とりあつかををととべき

位くらゐのもものででおおささるるささりりななががららポリスポリスををたた恒とこふふその身み分ぶん

を省おろミミその職務しよくを慎しんミミ人民じんみんに對たいしし扱さてて丁寧ていねい扱さて親切しんせき

ななるる接遇せつぐうに及およぶぶべき苦くるの者ものででおおささるる尤もつと今いまの東京とうきやうのホ

リスリスを大低士族たいていしぞくの輩ともがらななるる也や多おほくくの中なかに矢張やっはりの二

本差ほんさの象象しやうしやうが失うしなははるるばばややももそれそれをその職務しよくを誤あやまり

驕慢きやうまん粗暴ひやうぼうの所業しよがふに及およぶぶものももおおささりり外ぐわいされれど道理どうりに

於おかかるる所業しよがふををおおささるるべき苦くるややれれををおおれれ等らの馬鹿ばか

野郎やろうも即すなはちその持もてある棒ぼうを振廻おとせー報むねを以もちて竟つふ七
顛てん八倒はたうーて貫もふたる自給じきよをまた棒ぼうよりなくーその成
果さきも居酒屋ゐがやの湯出ゆで蛸たこ同どう様やう小鉤こかぎを以もちて鰯あぶを釣つさん事ことで
ぶざりませうまづさやうなる賛言さんごんを捨すおきナント舊きうよさん
先程さきふから僕ぼくが活話きわつーヤタル所ところを篤あつとお考かんがへたうされなぞ
五十いそ六ろく条じょう乃なり仔細しさいもポリスが罰金ばつぎんをとり上ある譯わけ柄がらも悉
く明白めいはくふ會得えとくなされまゝたらうさそれい足下あたまが其ま黒
ふぢりて論ろんぜられー筋すぢも所謂いそ水中ちゆうずうの泥鰌どじろ議論ぎろん箸しも
棒ぼうふもかゝらぬ不理窟ふりくつみて僕ぼくぢれをぬるよふれ他たの足下あたま

の心根を知らぬ人なれば法話一なされむを自然小

足下の貫目が軽くなりて尤らき年寄が馬鹿さ

き人物とあなづらうし及すべきやる向後お屹度法用

心なされませッコデ舊平さんとうぐおさる僕のおの議論

小向ひてゝ如何不ど強情なる足下でも藥罐を脱て後

余でござらう

舊平

イヤ開次郎さん降参さるまれば僕がうと心得たる

理窟を足下の法辨解を以て見れどもな悉く僻論で

あり外タダカ供いかに僕わたしをまだ口を黙もくに引込ひきこむもけふもあき
 ません但たゞしその事柄ことばもあれまでの理窟りくと大小相違さうゐ未たる
 ものろく即大陽曆おほひようれきの譯わけでぶさるあれまで世間よかんおぼれて舊
 来の曆れきを用る来り何一いち差支さしつかふるふともかゝりし何
 を以て先年政府せんねんせいふふおいて足邊あしべより鳥とりの起おこ如ごとく急いそ大
 陽曆ようれきをとり用もちふあれをお慶おのり賀がされしお更さらふ合点あての
 ちのぬ次第しだいでぶさるあれまでの曆れきをれを四季しき乃すなは氣候きこうを始はじ
 めとして天氣てんきの振ふり潮しほの満干みちひ小至いたるまで恒ね小定すだまりるて
 大低たいていかあらぬ事なれば職業しごくを管かむ便利べんりを勿論もちろん衣服いふくを

の外の用意に至りては自然に都合よく整へたる事で
おぼざるを改暦以来を益々正月も六たまぜふて櫻が
六七月頃不咲き雷や電が十月頃不なりをためき雪や
霰が四五月頃不降る次第なればかの王用綿入も寒帷子
といふ諺も背かずして萬事不付き甚だ不都合の多
きまゝでござるナント年頭の禮者が玉の汗を流しなみら
誠にお熱うて結構なる春でござると口上を述べ暑中の
客人がカタミ戦へながら大分むしくと寒ト牛と一禮
を拜つて見てもどうもあらへられぬでもござらんかたの故

不何家業の人ふいかぎやうのかきくらげになその職業の目的を失うしなふ

遂つひ不活計の大差支を生おこむる次第でござる全縣曆ぜんけんりきも百

姓せいが耕かう作さくする目的とずるが第一の役目やくめなすふ大陽曆たいやうりきも

氣候寒暑の事を明あきふ書載せざるゆゑ百姓ひやくあうもそれを用もち

ゐてその仕事しごとの目的を定さだむるゝとが出来ません婚あいにやぐ礼家れいけ他たり

其外そのほか祝義しよぎ不祝義ふしよぎ不付つき吉日きちうじつをえらむんとされども大陽たいやう

曆れきもそれを書載かきのせざるゆゑ遂つひ不惡日おくろふを用もちふられがた

めふ惡事災難あくしさいなんを引起ひきおこす者ものとござり外けだ蓋ふたもそれと畢ひ

竟さう大陽曆たいやうりきのためふ惡事災難あくしさいなんを招まねぐまけられな大陽曆たいやうりきも

また厄病神の手傳負三神の提燈持ともいふべきもので

かざるその上改曆以来も五節句盃などいふ大切なる物日

を慶一 天長節紀元節などいふ日けもそれからぬ日を祝ふ

事でかざる四月八日もお釋迦の誕生日盃の十六日も地獄の

釜の盃のあく日といふも犬おつ童も知りてをり年紀元

節や天長節の由来も六の舊平の如き牛鍋を食ふ老

爺といふともありませんから世間の人も心もなき日を

祝せんとて政府より強て赤丸を賣る看板の如き幟や

提燈を出さずするもたずなく少えぬ理窟でかざる元来

祝日いそひを世間せけんの人の祝いそふ料簡れりえんが寄合よあてて祝日いそひなれむ

世間せけんの人の祝いそふ料簡れりえんもたき日を強あて祝いそむ志こころむるも最もと

と無理むりやう事ことふ心得こころえ外また又僕またがある人ひとより少すくなりたるふ

他の属國ろくこくとすりし國くにもその後あとふ國くにの曆れきを守まもるもの

さうでござる即朝鮮ちやうせんが支那しなの年号ねんごうを用もちる琉球りゅうきゅうが日本にっぽん

の年号ねんごうを用もちるも矢張やっ張り夫その禰ねさうでござるまはれ

む先年政府せんねんせいふはにおいて毛唐けいとう人の國くにの大陽曆たいやうれきをおとり用もちる

なされしもとりもたき毛唐けいとう人ひとは降参かうましてその属國ろくこく

はちりし譯わけでござるし先程さきほど是下こゝが活活くわくくわになされたる

通りまの日本國を政府一人の物でせざる外なきる小
かく一人の料簡を以て我儘自在な毛唐人の属國とせれ
るも實は相違ぬとでもせざらんか且他の属國とせざるそ
の國人の身小とりて其の上とせき耻辱かとぞまうた
かるふかくの如く我儘自在な毛唐人は降参して日本
中の人民は寐身小水の耻辱を受さずとも思へを思へを
政府も相違ぬ者でせざる其の舊平の如きうち虫同様に
の者でも矢張日本人を僕に於て毛唐人の属國
となり耻辱を受くるを心外至極な心得外心外至極せられ

を政府の料簡せふふ れうかんのあらを決かつして大陽暦たいやうれきを守らぬ心組こころぐみ

でさざる盃けだも僕一己の私論ひたごころふあらぜ世間せけん一

般の心組さんこころぐみと見えて何ろ土地ちけふても徳川の正月とくがわは徳川の

盃えんよと舊曆きうれきを以て萬事の儀式ぎしきをとり行ふ次第しだいふて

あれ誰たれの心こころも毛唐人もうたにんのためは耻辱ちしよを受くる大とを心しん

外ぐわいの覺かくゆる詮據せんぎょでさざる女郎おんならうの誠まことと王子たみぎみの四角しかくあ

れを晦日みづかふ月つきが出了でと昔むかしより決かつしてなき者の譬たとえ

でさざる女郎おんならうの誠まことや王子たみぎみの四角しかくをあらされども政府せいふの

毛唐人もうたにん好すきの料簡れうかんより遂つひに晦日みづかふ月つきの出了でるやうふやう外ぐわい

又晦日は月の出るをふられどもあれがたの日本國中の

大不都合を起し本木のミナミに死なとも是れ大耻辱

を人民の領土與ふとも實に無念千萬侯と鼻水と一同

に流る次第でござる僕もこれ等の事を考へ出さ時を

夜分と寐るまゝとあたまにいて既先夜も満ちを臨破

り枕をす壊ちしとあり外タナニト開さん足下は日

本人なり殊に物の道理もよく法心得たされてるらる。

法方それであれ等の事も定て僕とは回論でござらう

関次郎

舊平さん少一靜みたまされませ足下の唾て中臆

て物のあいらがらかりませんタ併り足下のよく不

窟を考へ附るゝを實に驚き入り外足下の不窟才

恰も芭蕉を剥が如くあとからあらわれ出て更は盡さ

るやうは覺えおされを僕の如き無智短才たる者が腹

をよぢり喉をから青き嘴より黄たる聲を多しと

き立つとも更は法得心なきを無理とな心得ません

りながら愚者も一得ありといふたとあれをまた一應を僕

のふ所も聴きさるがふらうおぼざる且世の道理といふ

も理窟りくつと不理窟ふりくつの寄合よあひたる者ものうて、不理窟ふりくつといふと

も必かならずむ一ひとつのくる所ところもあるものなり理窟りくつといふとも必かならずむ

一ひとつの抜目ぬけめもあるものなり理窟りくつを以もつて不理窟ふりくつのありき

所ところをあらなり、不理窟ふりくつを以もつて理窟りくつの足たらざる所ところを補おぎなむか

くして正真あふたふの動うごかうぬ道理どうりが出来でき上あがる事ことでござるきを

れも今いま足下あきまへと僕わたくしとかく議論ぎろんをもちふ付つてと互たがひ小片かた

意地いぢが我慢まんの粗簡ねろかんを捨去すてきり心を虚むじりくして理窟りくつと思おもふ

事柄ことわりも直ただふ屈服くつぷくし不理窟ふりくつと曉さとれる言葉ことばも度あたぐり改あらた

むるが第一だいいち肝腎かんじんでござるッゴテ各おのづか々おのづか自己おのれの心中しんちゆうみよ

と思ふ所を言顯あらわすもいそひる言語自由の道理いどうりを

足下も足下の料簡れうかんよりと思ふ所を遠慮えんりよなく

仰おほせまけずらるゝか。僕わたくしもまた僕の料簡れうかんよりと覺おぼゆる

所を以て飽あきて返答おへんたふも及およぶ事でござるあれ畢竟ひつぎやうりくつ理窟りくつ

と無理窟ふりくつとを以て正ただしき道理いどうりを愈いふよく仕上しある譯合わけあひで

ござるサテ舊きうよさん僕わたくしも先刻せんこくからあまり弄も弄もつづけ

ゆゑ最早口が酸すくぢりて耐たへられぬやうぢつて来外き々

その上足下の話うへおま話わがあまり面白おもしろき無理窟ふりくつゆゑ

軀屈たいくつして欠伸うづひをかり出るやうは覺おぼえ外ほかか不話ふわ話わを

てゐる僕わたくしでもらたへら躬屈こつして欠伸あくびむかり出る事なれむ六
の本ほんを見みてゐらう、看客くわんかく諸君しよきんもなほさらさらはは躬屈こつなさ
れて欠伸あくびが遂ついふ坐睡あねむりか小言せうごよても愛いとふふとでござらう
されむあまりやあまうき鎗やりの出ぬうち一寸ちつと一服いふくやらかゝて
あとにまた下けの巻まきでやると話わ話わ一いっつませう足下あきこも
さうがあまり立身たちみ上りてのゑあからるゝ時ときを竟つひふ腹形はらぢやうが
よくきなりて疝氣せんきか寸白すぢやくでも起おこらんや急まづ先まづうらで
一ひ休やすみめされよう氣きを落おち付つけてお茶ちやでも一杯いっぱい召めい上あがりま
せ



